

---

# 夢のレベル6！？皆暴走しろー！！

ドリアンマスター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢のレベル6！？皆暴走しろーーー！

### 【Zコード】

Z5458M

### 【作者名】

ドリアンマスター

### 【あらすじ】

とあるシリーズより、完全なる作り話ですが、レベル6が誕生します。仲良し4人組、御坂美琴・白井黒子・佐天涙子・初春飾利の4人がチームを組んでミッション開始です！果たしてミッションコンプリート出来るのか…出来ないのか…

春 はじめは戦争！？（前書き）

美琴は中学3年になりました。春です。少し涼しい感じです  
いくつかんじで温かい田で読んでいただけだと大変光栄です。  
て

## セー はじめは戦争！？

時は2×××年世界は大きな転機を迎えていた。ヨーロッパ大陸が世界地図から消え去りイギリスだけが大陸として半分残つた。

東京は1／3が壊滅したが…

学園都市はとある戦争に勝利していたのであつた。

「ちよっと黒子…そのアイスまだ一口しか食べてないのに…ひどい！」

「ありつお姉様。黒子はお姉様の体型維持のお手伝いをしているだけですよ。最近ではお胸の方にも多少の肉がついてきた様子で…」「ばつ…何言つてんのよ！あんたわあ…！」

「まあまあ。白井さんも御坂さんも落ち着いてください。今日はそんな話するためにここに集まつたんじゃないですから。ねえ初春。

」と黒髪ロングヘアで花の飾りを付けている佐天涙子はこの場を仕切る。そう彼女は、このグループのリーダー。2日前に決まつたと「

「じゃあ佐天さんがリーダーね！わたしそーいうかつたるくてめんどうくわ…あーじゃなくてえリーダーシップとれるし仲間を思える佐天さんが適任だと思うの！リーダーを守るのがわたしたちの役目つてわかりやすくていいじゃない！」

と10年上である茶色の短髪に名門お嬢様学校である常盤台中学の制服を着た御坂美琴に押し付けられたのであつた。

——だいたい皆自分勝手で普段はまとまりないのよ……このグループはあ——

という思いを佐天涙子は口に出せずにいた。

佐天涙子・御坂美琴・白井黒子・初春飾利の4人は裏社会のグループ「ワンピース」のメンバーである。しつこいようだが2日前から……。

きっかけは佐天涙子の能力覚醒。（アソシヨートシミコレータ）彼女の能力は簡単にいえば予言能力、またの名を超高度並列演算能力。そうご存知の通り「樹計図の設計者」またの名がツリー・ダイアグラムである。

とはいっても現状はレベル2。天気予報、だつてわかってもせいぜい1週間先が限界だ。ただ演算結果内容次第では、能力が暴走するという結果を身体検査で残していた。

その能力覚醒を学園都市統括理事会の長であるアレイスター・クロウリーは待ちにまつっていた。

——佐天涙子の捕獲を何よりも最優先とする……

「そうすれば学園都市は復活するぞ……。」

その一言で彼女たちの日常は変わっていく……。

書 はじめは戦争！？（後書き）

これからどうなるのか……！？

## 武 いのちの木のトド（前書き）

ひよひと語のね語で（――・・・）

## 武 とある桜の木の下で

4日前の話。

とある晴れた日下がり4人の少女は桜並木の下を歩いていた。

「やつぱり春といえば桜よねー。んー癒されるわね。」

美琴は伸びをしながら言った。

「そーですわね。桜に比べたらどいかの誰かさんの頭なんてプロちゃんですね。うふふ…」

「ちょっとー！白井さんヒーリングです！私の頭をそんなものに例えないでください！ってか頭について触れないでくださいーーー！」

ふんふとそっぽを向く初春を見て呆れる佐天涼子。

——今年も皆相変わらずだなあ——

と物思いにふけっていたが、ここには平和があった。

そこへ少年が現れた。

「あんた…だれ！？」

「おーーー！」

美琴はその少年の姿にビックリした。その黒髪のシンシン頭の少年上条当麻は身体の至るところに包帯を巻き付け片足引きずるよう行走していたのだ。

「お前ら逃げるー佐天を…あいつらに渡しちゃダメだー！」

上条当麻は4人の少女に向かつて言った。

「えつ逃げろつてどこに？誰から逃げるんですかあーー？」

佐天は頭を抱え状況が理解出来ずにいた。

「それは私達の後ろをずっと付けてらっしゃる黒づくめの方のこと

を言つておられるんですの？」

「買ひ物の時から怪しいと思つてたのよね。拳動不審だし。」

「白井さん御坂さん気付いてたんですか！」

初春も訳がわからずパニックな様子で驚いた。

「で、あんたが傷だらけののもそれが原因なわけ！？だ…大丈夫なの？？まさかあの大戦争に参加してたとか…？今回は何なの？？なんで佐天さんが…まさか…」

「そうだ。美琴ならわかるだろ…。ツリーダイヤグラムがない今佐天の存在が学園都市にとつてどれだけ重要か…あいつらは佐天をツリーダイヤグラムの変わりとして利用する気だ。」

「そんな…」

美琴は愕然と立ち尽くした。なぜなら、学園都市の存在の大きさを御坂美琴は去年思い知らされたからである。

——今回の敵は学園都市つてわけ……

美琴に絶望の思いが駆け巡る。

「ここは俺に任せてお前たちは第23学区へ行け！そこに頼れる人がいるから！早く！」

「で…でも…あたしだけでもあんたの力に…」

美琴が思いを全て伝える前に上条当麻は言つ。

「いいから！あの子らを守れるのは美琴だけだ！頼むぞ…！」

その言葉に従い4人の少女はターミナル駅へ走りだした。美琴は当麻のほうへ振りかえり、顔を赤く染め無事を祈ると皆のあとを追い走りだした。

「で…23学区に行くのつてターミナル駅でほんとにいいの…？」  
美琴が呟く。行つたことのないところへ行く時には皆不安になるものである。いやいや、木山先生の子ども達助ける時に言つてますけど。

式 とある桜の木の下で（後書き）

呼んでいただきありがとうございました！！

スコズ 黒トナサハポンツ変態ー(前書き)

みひじくです！

## 5章 黒子はやつぱり変態！

4人の少女は電車に乗っていた。第23学区を目指して。

「でも第23学区って空港ですよね！？誰が待っているんですかね！？もしかして…外国人ですか？？白井さんに人生を語つた変な外国人とか！？それとも白井さんが尊敬してる変態外国人とか！？それともタイのオカマとか…」

「おだまりなさいなー」このブンコちゃんがあーーー！」

「白井さん…泣。」

「あの私…命狙われてるんですかあ！？なんで…これはまさか…七不思議！？」

「佐天さん…あなた全然状況がのみこめてないのね。」

美琴は状況を整理する。

「私達の能力は全て自分の頭で演算しそれを現実としているわ。あなたの能力は学園都市そのものなのよ。あらゆる事例を演算し結果を出す。その結果は予言となるの。例えば2万通りの戦場を用意し2万体のシスターズを殺害することでレベル6に到達する者がいると演算されれば、それは予言として実行されてしまうわ。それがどんなに恐ろしいことかわかる？どんなに恐ろしい内容でも学園都市では結果が全て…その結果のためなら何でもするわ。つまり大きく言えば、佐天さんの演算結果が学園都市の全てってわけよ。」

「わたしの力つてそーいうことなんですか！でもわたしがまだレベル2ですよ！」

「レベルなんて関係ないわよ…いつ能力が覚醒するかなんて誰にもわからないんだから！」

レベル1からレベル5にのしあがつた美琴の言葉に皆黙ってしまった。

「これから私達どうなつてしまつんですかね…。」

初春が力無く呟いた。

「とにかく第23学区に行きますわよ。あの殿方の言葉を信じて。」

「そうね。あのバカ…。つてか黒子！アンタパンツの中にスカート入つてるわよ！なんで気付かないのよ！アンタのほうがバカだわ…。」

「きや！お姉様エッチですわーーそれに黒子はバカじゃないですの！これもわざとパンツ見せてると言うはりますのよ！おーほほほ！」

「あんた本物の変態だわ…。」

電車は第23学区へ到着した。4人の少女はターミナル駅を出た。そこにはアスファルトとコンクリートに囲まれた巨大な敷地しかなかつた。

「誰もいませんの…？」

黒子が呟くとその少し離れた背後から足音がした。

「遅かつたじやねえかレールガン！こつちはだいぶ前からてめえが来るの待つてたんだよ…。」

美琴たちが振り返ると、レベル5の第4位麦野沈利が腕を組んで立っていた。その回りを取り囲むようにアイテムのメンバー滝壺理后・絹旗最愛ともう1人新人らしい金髪の地面に付くであろう髪を折り返して止めている外国人らしい人がいた。

「やばつ…」

美琴は思わず呟いた。

## 「ココニ 黒子はやひぱつ変態ー」（後書き）

ほんとうにありがとうございましたー！暇つぶしにでもなつて頂けれ  
ばほんとうにほんとうに光栄であります（Ｔ・Ｔ）

ヨン様 アイテムの皆様は怖可愛い！（前書き）

ビーナー！ストリートファイターつすw(。o。)w  
すみませんー嘘つす(ーーー)

## ヨン様 アイテムの皆様は怖可愛い！

麦野は挨拶代わりに原子崩し（メルトダウナー）を放つ。

「くそつ」

美琴は皆の1歩前へ立ち、その四方八方へ襲いかかる特殊な電子線の向きを全て変えながら叫ぶ。

「黒子！ 佐天さんと初春さんを連れてここから逃げて！」

「でもお姉様。相手は4人しかも高位能力者みたいですし…」

「あいつらの狙いは佐天さんなのよ！ それに黒子私を誰だと思ってるの！ ？ わたしなら大丈夫よ。」

美琴は笑みを浮かべ振り返る。

その思いを感じとった黒子は素直に応じる。

「わかりました。お姉様どうか黒子が来るまでご無事で…」

「ダメよ… 黒子。あっちにはどんなに逃げても居場所を突き止める能力を持つ人がいるわ。だから佐天さんから離れちゃダメよ！ あと… なおしたつもりかも知れないけどまだパンツの中に入っ

てるわよ！」

「だからお姉様わざとですのよー！」

「いつまでだらだら話してんだよー！」

と麦野は原子崩しを放つ。それを美琴は力をこめ麦野に向けて跳ね返すと同時に、黒子たちは一瞬でその場から消える。

「ちっくソガキが！」

麦野は、それを能力で盾のようなものを作り出し消し飛ばす。

「さつきの3人超追跡しますか？」

と絹旗は麦野に聞く。

「そうだな。お前ら3人はあっちを追つて。このクソガキはわたし

が潰す！」

「超了解しました。滝壺さん超急ぎましょう。」

絹旗と滝壺は佐天達を追うように走りだしたが、黒い壁に阻まれた。

「なつ……」

そこにいた5人を直径30mほどの円を描くように砂鉄が取り囲んだ。

「アンタレベル5のくせにレベル0に負けたらしいじゃない。そんなおばさん一人じゃ役不足なのよ！」

「一いつてわたしも人のこと言えないんだけど――

と美琴はどんな能力も聞かないレベル0の少年のこと思い出していた。

「超ナメられたもんですね。」

と絹旗は言いながら、美琴のほうへ方向転換し向かってくる。美琴はとつさに頭から電撃を放ち絹旗にぶつける。

「私の<sup>オフ・オン・スマート</sup>窒素装甲にそんなものは効きませんから。」

「えつ……」

絹旗は拳を握り美琴に向ける。美琴は磁力で眼前の床を持ち上げシールドを作るも、絹旗はそれを拳で容赦なく破壊する。その破片が美琴の身体を襲うもすぐさま電撃にて一蹴する。しかし電撃が間に合わなかつた破片が肩に当たり美琴の表情が歪む。

「ぐつ……」

「――あの能力やつかいね。あの防御フィールド何なのかしら……」

「アイテムを甘く見ないで頂きたいものです。この黒い竜巻を消すことを超オススメしますが。」

「クソガキがつけあがつてんじゃねえよ。」

麦野は手に力を込める。

ミン様 アイテムの皆様は怖可愛いいー（後書き）

呼んでいただきありがとうございますー アイテムの設定とかめちゃくちゃですみません（^\_\_^）

# GO GO レールガン！（前書き）

お姉様！早くやつつけでくださいいましー！  
お姉様..おつねこせつまああん(トロト)

## GO GOレールガン！

「はあはあ……」

美琴は、麦野と絹旗の2人を相手に戦っていた。原子崩しの軌道を変えながら、肉弾戦で挑んでくる絹旗の攻撃を地面を押し上げ盾を作つたり回避していた。

「チツしぶとい野郎だ。」

麦野は舌打ちしながら、四方八方に原子崩しを放つ。美琴はその電子線の軌道を変え絹旗のほうへ向ける。

「くつ

絹旗は横へ回避しようとするも間に合わない。原子崩しは絹旗の体に直撃し、5mほど宙を飛び絹旗は地面に叩きつけられた。

「ちつ

「次はあなたの番よ！」

美琴の眼前にはコインが宙を舞っていた。右手に触れた瞬間、音速の3倍以上の速さで超電磁砲が放たれる。

「なつ……やばつ！」

麦野は能力で盾のようなものを作りだすも、超電磁砲は止まらない。

「がつ……はあ」

麦野は盾ごと跳ばされ、砂鉄の巻きにぶつかりそうになつた。その瞬間、美琴は砂鉄の巻きを消し去り麦野はそのまま20mは吹き飛ばされた。

「絹旗！麦野！」

さつきまで戦いを傍観していた女の子、滝壺理后が叫ぶ。彼女の能力はAIMストーカー。美琴の作った砂鉄の巻きの中では、彼女はどうすることも出来なかつたのである。滝壺は絹旗のほうへ向かつて走ろうとしたが……。

「き……絹旗……いない……？」

「アイテムの実力は……こんなものじゃないです。あなたには超死ん

でもらいます。」

美琴のすぐ背後より声がした。絹旗は拳を美琴の横腹めがけて振りかざす。

「なつ」

美琴はすぐさま砂鉄の壁を作り絹旗に向け砂鉄の龍巻で攻撃する。鎧素装甲にて体を守られている絹旗だが、あまりの衝撃に身を屈める。

「残念ね。私は電磁波で相手の気配が掴めるのよ。」

美琴はコインを掴みレールガンを放つ。絹旗の体は10m以上宙を飛び地面に叩きつけられた。意識を失った少女は倒れたまま動かない。

「「」のままじや引き下がれない！2人はわたしが守る。」

滝壺理后は美琴の前に立ちはだかる。そこへもう1人の仲間、金髪の女が初めて口を開ける。

「無駄な争いは止めたるよ。滝壺は2人を連れて引き返しなさい。あなたは私に着いてきたれよ。」

「この人が黒子に恋愛を語った変態外国人！？じゃなくて…だ…だれなの？そんな日本語誰に習つたのよ。」

美琴は目を見開いていた。

「失礼たるやつね！変態ではないわいな！」

GO GOレールガン！（後書き）

呼んでいただきありがとうございました！まだまだ続くつす（@ー  
@）

録 正しい日本語教えてください…（前書き）

魔術師になりたい…（…）

## 録 正しい日本語教えてください…

「わたしの名はローラ・スチュアート。一応なんだけど必要悪の教リウス会の最大主教つていうのしたるよ。わたしイギリスからいろいろあってここへ来たんだけどね。あなた達にお願いがありけるのよ。」と金髪の女は話す。

「お願ひつて…？」

「私達のこと何か知つてる？ つていうかネセカリウスつて何！？ 都市の名前かしら… つてことは市長してたってこと…？」のふわけた女が…――

美琴は一瞬でいろんな思いがめぐつた。そんな美琴を無視し、ローラは腰に手をあて告げる。

「わたしの下で働きなされよ！ レベル5御坂美琴とその仲間たちや――」

ローラの満面な笑みに美琴の顔が苛立ちを見せる。ローラは営業スマイルをやめ慌てて、

「すみません外人なので日本語難したるて、良かつたら働いてくれまいか？ 頭さげたるよ。私変な人じやないよ――！」

美琴の苛立ちは治まらない。美琴は怒り出すとしつこいのであった。

「全然なんのこっちゃわかんないのよ――！」

「簡単な日本語たるよ！ お前はほんとに日本人なるか！？ 日本人の特有の仁義をお持ちではなさらんのか――！」

ローラはデタラメに喋り続ける。

「もーほんとに意味わかんないのよ――。」

美琴は半分泣きそうに言つたのであった。

「もうほんとに嫌だ。こんな金髪と関わり合いたくないのよ。とりあえず…――」

美琴は後ろに振り返り一目散に逃げだした。

「美琴さん！ 美琴さんよ――！ なんでだよ――う」

ローラは泣きながら叫んだ。

何分くらい走ったか。ふーつ、と美琴は一息ついて黒子に電話をかける。

「黒子いまどこにいる？さつき変な外人に絡まれて大変だったのよ！とにかく合流し…」

「誰が変だつてのよー！」

美琴は顔を横に向けると汗だくだくの金髪が横に

「ぎいやあああー！」

不覚にも美琴は氣絶してしまった。ローラはわなわな震えながら叫ぶ。

「ほんとさつきから失礼極まりないたるよー！」

「…いたまーお姉様ー！」

「んつ…………。くろー」…」

美琴は黒子の膝に頭をのせ、黒子の腕に抱かれて、黒子の手の平が胸の僅かな膨らみを握りしめているのを感じた。

「なあにやつてんのよ…アンタはあー！」

ビリビリと電撃が黒子を襲うも、なんだか幸せそうな黒子であった。

「ぎやふーーん……」

とある空港の駐車場の一角に皆は集まっていた。ローラ・ステュアートも一緒に仲間のよつたな顔していた。

——うつざあ——

美琴はため息をついた。

## 録 正しい日本語教えてください…（後書き）

（ト・ト）「愛読ありがと「ひ」れこます！  
次は新キャラ出るかもです（ー・#）

何なのよ とにかく佐天さんを守れ！（前書き）

すごい能力覚醒すると敵も多いんですね…。わたし…能力無くて良かつた！バンザイ…（Ｔ○Ｔ）（Ｔ○Ｔ）

## 何なのよ とにかく佐天さんを守れ！

「あのーそろそろ話し聞いてほしいけど… よろしいか？」

ローラは恐る恐る口を開いた。

「どうぞ。お話になつてくださいな。」

中学生の黒子は大人な対応で答えた。

「ありがとうございます。とりあえず、ここは敵に囲まれたる状態にあるから、どうにか逃げてこの紙にかかれた場所に来てほしいたるのよ。わたしは戦い専門ではないたるから一人先に逃げるけど、絶対にあなた達の力になりうるから信じたるよ。絶対来いよ！ 来なかつたら私泣くわよ！」

皆にそう告げ、黒子に紙を渡したローラは、目をキラキラさせその場から消える。

「囲まれてるか…。」

紙に書かれた地図を見ながら美琴はつぶやく。

「ほんとにそこへ行くんですかあー！？ 結局あの人つて何なんですかね…。まさかあの男の人が言つてた待つてる人…？」

佐天さんは複雑な表情をして聞く。

「あの人私達のこと知つてるっぽかっだし… いまは頼るしかないのかも知れないわね。とりあえず今はここから抜け出すことを考えましょ。」

「紙に書いてあるのは隣の学区のとある教会ですわ。ターミナル駅に戻るのは危険ですし、走つたりテレポートしながら地道に行きますのよ。」

「白井さんのテレポートって2人までですもんね。3人一気に出来れば難なく抜けれたのに残念です。」

初春は悪気なく言うのを美琴はスルーする。

「さあ行きましょ！」

「はあ。 もーすぐ隣街ですよ。」

「黒子お疲れ！ もう少しがんばろ！」

敵に見つからないように黒子がテレビポートにて先回りしルートを探り、4人は進んでいた。

「はっ！」

黒子の前に2人の影が立ちはだかる。大学生くらいの茶髪で180cmはある長身の男は、微笑んでこいつを見ていた。

「お嬢様達どこへ行くの？」

「ちょっとダイサク～！ どうだつていのよ～。私達には関係ないない～。」

そう答えたのは、ピンクのロングヘアにバッチリメイクのお色気ムンムンな20歳くらいの女だ。

「君たちに危害を加える気はないよ。じゃあ、その子をこいつに渡してくれるかな？ はは。 なあマリ～！」

「そ、そ、そ、そ、渡そ、渡そ～！」

地面を跳ねながらきやぴきやぴと女も男の後に続いて喋る。

「なんだか知らないけど、それは無理な話よ～！」

美琴はバチバチと電流を漏らしながら、皆の1歩前へ出る。

「黒子わかってるわね～！」

「はい。 お嬢様～。」

黒子は心配そうな表情で答え、佐天・初春とともにテレビポートする準備をする。

「そ、そ、そ、そ、そ、せ、せ、せ、せ、ないのよ～。 あたしの能力もテレビポートなのなの～。 レベルもあなたと一緒にだとい～。 仲良くしてして～。」

「えつ～」

黒子が一瞬戸惑った間に、マリはテレビポートし佐天を掴むとダイサクの横へテレビポートする。

「やうじうじことだから。 はは。 ジやあ…」

「ちょっと待ちなさいよ～。 あとなんか2人とも話方イライラするの

よー！」

ダイサクが話すよりも先に美琴の電撃が飛ぶ。しかし、そこにはダイサクの姿はない。

「お嬢さん可愛い顔してるが、喧嘩っぽやくてしつこいそうだな。はは。」

美琴のすぐ後ろで声がした。マリのテレビポートによりダイサクは移動したのだ。頭に血が登っている美琴は驚く。

「しまつ…！きやーーー！」

何なのよ とにかく佐天さんを守れ！（後書き）

「J愛読ありがとうございます！」

能力の幅とか使い道って難しいですね…（T-T）  
とりあえずエレクトロマスターを極めたいです（X-X）笑

## 八 失敗したってビートルでもなるよーだって自分の気持ち次第だから（前書き）

人生悩む時も後悔する時もあるけれど周りからすればどうってことないことってよくありますよね（ーーーー）そう！それは自分の中だけの小さなこと…気持ちの持ちようで世界は変わる！皆世界を変える力を持っているんだよーい！！

つて信じてます（Ｔ○Ｔ）

## 八 失敗したってヒートでもなるよーだって自分の気持ち次第だから

ダイサクは美琴の手を取り、力いっぱい引き寄せる。そして抱きつく。

「なつ」

美琴は顔を真っ赤にし、ダイサクの胸に顔をうずめながらすぐさま電撃で反撃する。が、電撃がうまく出ない…。

「お姉様に何してますの…！「ふーふーふんがあーーお姉様早く反撃してくださいませーー…！お…お姉様！？」

憤慨していた黒子も美琴の異変に気付く。

「ち…力が入らない…。なんで…。」

「ぼくの力はAIM放出なんだ。僕は手に触れてる人の力を外に放つことが出来る。はは。君の力はどんどん抜けていくよ。」

ダイサクは美琴を支えながら話す。

「やば…。足にも力が入らない。氣を失つ…だめ…。」

美琴は自分の体を支えることも出来なくなり、がくんと膝が折れダイサクにもたれかかり、虚ろな表情になつていく。そんな美琴をダイサクは両手で抱き上げて喋る。

「はは！可愛いね。君も連れて行きたいくらいだ。」

「だめだめよ。その子を連れて行つたら、次はあたし達やられちゃうかもかも。行きましょ。」

「そうだね。はは。行くとしよう！またね！」

ダイサクは美琴をぎゅっと抱き締めると、床に優しく寝かせる。美琴はゆっくり目を閉じながら、マリがテレポートするのを見た。

——佐…天さ…——

美琴はとある教会で目が覚めた。

「お姉様！」

「御坂さん大丈夫ですか…？」

黒子と初春は美琴の側で、ずっと心配そうな表情をしていた。

「一人足りないよう見えたるけど。」

ローラ・ステュアートは言つ。少しの沈黙のあと、美琴が口を開ける。

「私、佐天さんを守りきれなかつた。レベル5なのに……。私は油断した……。」

「お姉様……。」

黒子も何も出来なかつた氣持ちでいつぱいだつた。今頃佐天さんはと思うと、皆に絶望の思いが走る。ローラは椅子から立ち上がる。「今からあなた達にはグループを組んでもらいたるよ。その指揮官はわたくしローラ・ステュアートなり。指揮官より、あなた達にグループ名を授けたるぞ！」

「はい……？ 何を言つてますのん。」

黒子が口を挟むのをローラは気にもとめず話し続ける。

「その名は……そうねえワンピース！ 一つの平和のために戦つてどう！？」

「平和……。」

美琴は脱力した上体を起こした。

「わかつたならとつとと皆であるの子の平和な日常を取り戻してきたれい！！ 指揮官の命令は絶対たるぞ……！」

「助けるつつつたつて……。」

絶望の中にいた3人だが、その言葉に思わず笑みがこぼれる。やることは決まったのだ。思いは一つ、佐天さんを助けたい！

Q 指揮官は任務成功を本当に望んでいますか？（前書き）

落ち込んだ時、救ってくれる一言ひて大事ですよね（ーーー）自分にその言葉毎日くださいーーー！！皆//シションインポツシブルーーーー！

Q 指揮官は任務成功を本当に望んでいますか？

「それでは指揮官！作戦をお願いします！」

希望に満ちた表情で初春はローラに尋ねる。

「え…作戦なんてないのよ！あなた達のがんばりのみなるけど…じやダメ！？」

「じゃダメですよー！」

黒子は一喝する。

「佐天さんがどこにいるかもわからないですし、意氣込んだまでは良かつたのですが…お先は真っ暗ですね。」

「そうね…。」

美琴も険しい表情をする。ローラは美琴の肩に手を置き、慰めるよう優しく話すかけた。

「居場所くらいなら知りえたるよ。あと捕らわれた目的も。」

「ちょーーー！アンタ何なのよ！もーほんとにこの人嫌い…。」

美琴はそう言ってため息をついた。ローラはやっと知つていてことを全て話した。

「では話をまとめますと、佐天さんはレベル6進化論の演算のために連れ去られたと、そして今もそのとある研究施設にいるということですね。」

黒子は話を続ける。

「その施設の内部情報や敵戦力など情報不足は否めませんわね。お姉様。」

「そうね。初春さんが携帯してるPDAで何か情報掘めないかしら。」

「調べてみます！」

初春が動きだすと同時に、午前0時をすぎ日付が変わった。夕方までは、4人で楽しく遊んでいたのに今では世界が変わってしまったような…そんな重い空気が流れる。教会の周りに建物はなく、自然

に囲まれた広大な土地のため不気味なくらい静かだ。

——一刻も早く佐天さんの無事を確認したい——

皆そう思っていた。

「ありました！」

「さすが初春さん！」

「えつと、そこでは多才能力を使えるレベル6への進化について研究してゐるみたいですね。これが内部地図ですので印刷しますね。今回警備にはグループっていう裏社会の小組織と大学生裏サークルのゴリラつてどこで総勢7名です。あと研究員が何人かいるみたいですが。」

「ゴリラつてさつきの2人組かしら…ピッタリな名前ね！よし！これで大体のところはわかつたわね。黒子と私がペアで動いて佐天さんの救出、初春さんは外で侵入・脱出経路の検索・指示をお願い！」

黒子と初春は頷く。

「で、アンタは…」

「私は指揮官たるゆえ、遠くで見守らせてもらいたる…」

「はいはい。」

やつと美琴も慣れてきた様子で、彼女を受け流すことに成功した。そして、美琴は黒子と初春の肩に手をやり円陣を組ませる。

「じゃあ取り返しに行くわよ！一人の平和を…皆の日常を取り戻すため…私たちの友達佐天さんを…」

3人は互いに目を合わせて頷いた。

「はい！」

「ちょっと、なんでわたしハブりたるの…ひ…ひどい…ブン。」

ローラはいじけてしまった。そこに指揮官の威厳は微塵もなかつた。

Q 指揮官は任務成功を本当に望んでいますか？（後書き）

「愛読ありがとうございます（Ｔ・Ｔ）ほんとはローラは偉大な人です！笑

でもグループってあの人たちがいるのでは……お姉様大丈夫ですか！？勝てるのか……？

いやつムリムリ！！化け物いるよ（Ｔ〇Ｔ）

十 進め！敵は地下にあり！！（前書き）

敵は！本能寺にあり！！

パクつてみました（――）ZZZ

敵は強そうなり…。

## 十 進め！敵は地下にあり！！

とある研究施設の近くに3人は来た。見た目にはそれほど大きくな  
い研究施設は、コンクリートで出来ており最上階の2階に1つ窓が  
ある。あと、入り口は2箇所あり表は鉄格子に南京錠、その内側は  
シャッターが締まり電子ロックされている。裏口は電子ロックのみ  
だ。

「裏口からの侵入は簡単だけど…罠かしら…？」

美琴は頭を悩ます。

「でもお姉様。この施設は地下10階建てですので、地上のどこか  
ら入つても一緒かと。初春！侵入ルートはどうなつてますの！？」

「はい。モニターによれば佐天さんは地下9階にいる様子です。あ  
の2階の窓のある部屋のちょうど下の部屋になりますね。エレベー  
ターは大小の2つ、階段はメインと非常用の2つです。基本は白井  
さんのテレポートで行きましょう！小型通信機でわたしが正確な座  
標をお伝えしますので、任せてください！どーしようもなくなつた  
時の必殺技は地下に向けて超電磁砲を打つのが良いと思います。」  
「その必殺技は使いたくないわね。」

美琴は苦笑いする。

「じゃあ行くわよ！」

「くれぐれも気をつけたるよ。危ない時は逃げる！あの子は間違  
いがない限り殺されたることはないんだから。」

ローラは真剣に2人に告げる。美琴と黒子は小さく頷き、闇の中へ  
走り出した…。

「よし！これで施設内のセンサーや監視カメラに私達は反応しない  
わ。じゃあ、あの窓の内側にテレポートして潜入しますか！初春さ  
んそこには人はいるかしら？」

「地上階には誰もいません！」

初春はすぐに答える。黒子は美琴を連れ、窓の内側にテレポートす

る。

「なんだか静かね……。」  
美琴達は奥へ進んで行つた。

「地下9階とある個室」

「敵が侵入してきたみたいだにやー。」

グループの一員である金髪にサングラスの少年、土御門元春は言った。

「ほんとに外部から接続してゐるこのカメラにしか写らないんだな。ここ過ぎればどこにいるかわからなくなるぞ。大体こんな一般人の女の子相手だとは聞いてないにやー。」

「けつ！またあいつかア よオ……。何やってエんだア。」

と弦く白い髪に黒いシャツの少年は、学園都市が誇るレベル5の頂点一方通行である。グループの一員である彼は、美琴と何度も顔を会わせたことがあった。

「まさか御坂さん……。」

同じくグループの一員である爽やかそうな少年は、常磐台中学理事長の息子の海原光貴の姿をした魔術師。彼は美琴のことが好きなのである。

「あ……あのツインテールのテレビ女は……。あの時の…………。」  
ぶるぶる震えながら話すグループの一員の少女は結標淡希。能力は座標移動・レベル4であるが、以前黒子との激闘にて精神的に追い詰められたのだ。

「にやんだあ！皆知り合いかあ！？人のこと言えないけど。あの子当麻の知り合いだしなー。こ……これはやりにいくにや……。」

## 十 進めー敵は地下にありー！！（後書き）

「」愛読ありがとうございますー！ つて毎回書いてますが、本当は愛読してない人がいるんですねこと…（T.O.T）ネガティブシンキング中です 毎日の日課なんで気にしないでください！ 笑

イイヨ 私たちにはあなたが必要なんだからー！（前書き）

演算つて難しいですね(Ｔ・〇・Ｔ)  
努力で演算能力は上がりますかー？自分だけの現実はいっぱいあります…笑

イイヨ 私たちにはあなたが必要なんだから！

そんな微妙な空気を一方通行が一掃する。

「あアでもよオ仕事だろオが！俺は全力でいくぜヒー..」

その時、個室のドアが開く。

「はは。怖いですね！でも今回は僕たちに任せて頂きたい！」

「そうねそうね！」

部屋の入り口にダイサクとマリが立っていた。

「君たちが手柄を取りたいのはわかるよ！何故ならあの子を誘拐したのも僕たちの手柄だからね。はは。嫉妬とかやめてくれよ。僕だつて！」

「是非ともお願ひします！」

一方通行以外の3人は、声を揃えて頭を下げたのであった。

（地下9階実験場）

佐天涙子は体の複数箇所に電極を付けられ、椅子に座った状態で手足を縄で抑制されていた。

「いいか。君の仲良いい友達の無事を祈るなら、素直に言うこと聞けってんだ。どーせてめえはこれから先一生裏組織に追われるはめになつちまつてる。皆がてめえの能力を利用するだろうよ！…わかつたらこの書類に目を通し、今すぐに演算しちまえ！」

オレンジ色の髪をした白衣姿の細マッチョの男はそう言つと、書類を佐天の目の前に置く。

「…そつか…。私もう前みたいな生活には戻れないんだ…。もう一生…！」

佐天は絶望するしかなかつた。力なく顔を下に向けると、偶然書類が目に入る。

「…レベル6への進化論・多才能力者…うつ…なに…？気持ち悪い…」

「ううー…「わあああ！」

佐天の目が血走り苦痛の表情になる。その直後、演算結果が電極を通してコンピューターに現れた。

「オリバーさん！すごい結果が…」

パソコンの前にいた科学者が、オレンジの髪の男に向かつて叫ぶ。「ま…まさか。」

オリバーは驚いたがすぐに笑う。

「今日が素晴らしい日になるかもしねえな。」

「はあはあ…な…なに…いまの…？」

佐天は気を失いそうなほど疲労していたが、演算結果ははっきりと覚えている。

次の瞬間オレンジ色に光る槍が、ドゴオツと地下9階の実験場の壁を貫く。佐天は見覚えのある光に一瞬笑みを浮かべるも、すぐに険しい表情になる。

「—来ちゃだめ—」

「御坂さん白井さん…私のことはもういいですから来ないでください！」

佐天は目に涙を浮かべ叫んだ。

「ふふ。良いタイミングだ！せつかく来たんだからよ、てめえらも保護してやんよ…」

オリバーは美琴たちに向けて言う。

「佐天さん。もういいなんて言わないで。私はあなたを連れて帰る。あなたの居場所は私達が守る…これから先もずっと守るんだから！」

美琴は力いっぱい叫んだ。

「裏社会を知らない世間知らずのお嬢さん。はは。可愛いけど甘いよ…君たちは逃げることなんて出来ないんだから。」

コンピュータールームよりダイサク・マリが近づいてくる。

「ああ始めよ始めよ~。」

イイ三 私たちにはあなたが必要なんだからー！（後輩や）

「J愛読ありがとうござります！」

レベル6の演算結果謎ですね（ーーーーー）

自由で 最強の敵… だめだめ… お姉様… 落ち着いてください… (前書き)

▽▽ですの一…お姉様の戦闘…ブルーレイに納めたい…り…ですの一…  
オホホ…  
じゃなくて…黒子はお姉様の力になります… ( ^ ^ ) お姉様大好き  
です…。

自由で 最強の敵…だめだめ…お姉様…落ち着いてくださいまし…

「あいづら…！」

美琴は拳を握りしめ青白い光をバチバチさせる。

「ふふつ。」

ダイサクとマリはゆっくり歩いて向かってくる。次の瞬間2人は姿が消える。

「私の体からは常に微量の電磁波が出てるから気配がわかるって言つてんのよおおー！」

美琴は後ろを振り返ると、左手の平を開き青白い光を放つ。

「くつ！」

ダイサクとマリは慌ててテレポートする。

「あんた達の戦略はばれてんのよ。常に一人一組で行動して、テレポートして近づいて能力を奪うしか脳がないでしょ！」

美琴が話すと同時に、ダイサクとマリは体をびくつとさせる。

「ふふふ。だからって君に僕達を止めること出来るかな…な…」

美琴は磁力でダイサクとマリのいる床だけ、1m以上「ゴロッ」と勢い良く持ち上げる。

「きやつきやー」

そして、持ち上げた床だけを磁力で横に飛ばした。ダイサクとマリは美琴が飛ばした床にできた深さ1mくらいの穴の中に落ちる。

「ぐは…。レベル5…。なんてパワーだ…。」

ダイサクが上を見上げると美琴の右手があつた。そこから青白い光が放たれ、一人を直撃した。

「黒子！いまのうちに佐天さんを解放しましょー！」

黒子は佐天が座っているところへテレポートし、佐天を連れ美琴のもとへ戻る。

「よし！逃げるわよ…。」

美琴はそう言いかけて、背後より殺氣を感じ振りかえる。

「ア…アクセラレータ…。」

美琴の顔に恐怖が走る。しかし、今は守るべき人がいる美琴は逃げられない。

——私がこの子たちを守る——

「黒子！あんたは佐天さんを連れて逃げなさい！」

「で…でもお姉様…。」

「いいから！早く…！黒子危ない！」

美琴は叫んだが、遅かった。一方通行がさつきまで佐天さんが座っていた椅子を蹴り、バラバラになつた破片が黒子を襲つた。鋭い刃が右胸・腹部・両足に刺さり、黒子は多量の出血をし倒れる。

「いやああああああ————！」

隣にいた佐天は絶叫し倒れた黒子に呼び掛ける。

「白井さん…し…らいさあ…ん…。ひい…くつ。」

黒子は動かない。

「く…るこ…。うそ…いやつうわあああ！—アクセラレータアあああああ！—」

美琴は絶叫しながら真つ直ぐ一方通行に向かっていく。電撃を一方通行の周りすれすれに浴びせる。次の瞬間床や壁の鉄筋コンクリートやパイプを数えきれないほど膨大な量を一方通行にぶつける。一方通行に当たつた瞬間に跳ね返るも、美琴は床を持ち上げ盾を作り防ぐ。そして盾をぶち壊すように、その後ろから超電磁砲を放つが一方通行はびくともしない。

——こんなんじゃ駄目だ！力が欲しい！あいつを倒す力が…くそ…黒子…くろこおおーー

自由だ 最強の敵…だめだめ…お姉様…落ち着いてください…（後書き）

「」愛読ありがとう「」やれこます！大大ピンチです（ ー ー ）黒子は重  
体で一刻も早く病院へ…  
でも敵を倒せるのか…（ ． 一 ． ． ）最強です。

## 十参 力をください……あいつを倒し、あの子を助けるくらいの力でいいんです

時に力は誰かを守れるけど、傷付けることもできる。  
ほんとに必要な力だけあればいいのに…

(・\_・;) v

十参 力をください……あいつを倒し、あの子を助けるくらいの力でいいんです

「俺には時間が限られてなんだからよオ、とつとと終わらせよオーザ。」

一方通行は空気をベクトル操作する。美琴から放たれる電撃に反応し、美琴の周りの空気が爆発した。瞬時に両手でガードするも、ドゴオオツという音とともに美琴の体は10mは宙を飛び地面に叩きつけられ横向きに倒れる。小型トランシーバーは粉々になる。

「い…たあ…。」

かろうじて意識はあるが、体に力が入らない。佐天と黒子の近くに飛ばされたらしく、美琴はすぐ横で佐天が目に涙を浮かべているのを見た。美琴は手を握りしめる。

「…負けられない…。早く倒して黒子を病院に連れて行かないと…。立て…立たなきやダメよ…。お願ひ…黒子を助けたいの…。」

美琴は上体を起こし一方通行を睨む。

「学園都市1位…だから…って…偉そうにしてんじゃないわよ…。殺してやる…。黒子のこと絶対に許さないんだからあ…！」

「えつ…。」

佐天は驚きを口に outputs。今まさに頭をよぎったことが信じられなかつた。

「…あの人…が1位…。つて…ことはもしかして…。」

佐天は状況を把握する。

「御坂さん…私に電撃を浴びせてください。」

佐天は真剣な眼差しで美琴に言つ。両手を地面に付き座つて いる美琴は驚き、困惑した表情をする。

「え…なんで…？」

「とにかくお願ひします…」

「そんなこと出来ないわよ！大体アイツを倒さなくちゃ…。」

「御坂さん…アイツを倒すためです！零距離からの電撃を手加減し

て…でも私を倒すくらいのものを…わたしを信じてください…！」

佐天の気迫に美琴は押される。

「？？？……わかったわよ…どうなっても知らないんだから…。」

そう美琴が言つと、佐天は美琴に抱きつき胸に顔を埋める。

「信じてくれてありがとうございます。御坂さんお願いします…。」

美琴は零距離からの電撃を放つ…。バチイイイイ…！…！

佐天は氣を失いかけた。その時…

「えつ…」

―――れつて…佐天さんの頭の中…！…せつきの電気攻撃で佐天さんの頭の中とリンクしちゃつたんだわ…。こ…これは…！…！…

佐天はふらふらしながらも黒子と手をつなぐ。

―――うう…。今度は何…？…こ…これは…黒子…！…！…！…

「佐天さん…わたし…わかつた。ありがと…。アイツを倒さなくちゃ。」

美琴はゆっくり立ち上がる。

「おいイ！別れの挨拶はすんだのかア…？…じゃあ時間は待つてくれねエんだからなア。行くぞオ！」

一方通行はゴウツと足元をベクトル操作し、もの凄いスピードで美琴に迫る。美琴は同じスピードで一方通行に突っ込んだ。同じスピードで…。？…？…。お互いがぶつかり火花が散る。

「なつ。どーいうことだよオテメ…！」

一方通行は理解出来なかつた。

十参 力をください……おこつを倒し、あの子を助けるくらいの力でいいんです

「愛読ありがとう」「やれこおむ！」

なんか急展開してみました。美琴はびいひしがやつたんでしょうか…

( - - # ) 愛の力 > ( ^ o ^ )

十四 予言.. 全ての条件が揃つた時人は未知の世界へ。 それがあなただつたな

美琴さん (@\_@) 頑張つて (T\_O\_T)

## 十四 予言 全ての条件が揃つた時人は未知の世界へ。それがあなただつたな

「私…今なら何でも出来るわ。アクセラレータあんたは私が倒す！」  
美琴は空気を操作し、そこへ電撃を流し爆発させる。

「なつ…にイ。」

一方通行には爆発は効かない、全て反射したが驚きを隠せない。

「あなたのベクトルを逆転してあげるわ！」

美琴は一方通行の頬を触り、ベクトル操作する。そして能力を放出させる。

「この能力はアヤツのじやねエのかよオ…！ち…ちからが…。」

一方通行はダイサクの方を見ながら信じられない様子で叫ぶ。

「これが…！…ふふ…はははは…！…とうとうやつちまつたんだ…！…  
学園都市の夢…レベル6だあああああ…！」

今まで陰で身を隠していたオレンジ頭のオリバーは叫ぶ。

「はは…零距離からの電撃を浴びせることで、御坂美琴の脳波が佐天涙子の脳波とネットワークを構築、様々な脳波を電気信号に変換する演算を修得。そして佐天の演算能力を介することで白井黒子の脳波の電気信号化に成功する。そして、テレポート能力の演算を理解すれば…脳波ネットワークを零距離からしか結べない状態でも次は佐天や黒子に触れずに脳波のネットワークをテレポートさせ、パーソナルリアリティーの演算を電子記号化し解読できるってわけだ。御坂美琴はAIM拡散力場の集合体となつた。つまりあの子は…多才能力者つてことだ。誰も彼女を止めることは出来なくなつちまつたんだ…。オレらの手では、とても彼女を制御出来やしねえじやねーか！くそつたのが…。」

オリバーは、美琴を支配できる状態にしてからの能力覚醒を望んでいた。一方通行が床に倒れると、オリバーは腹の底から悔しい様子で床に四つん這いになり、右手で地面を叩く。

美琴は、オリバーのことなど気にも止めない。

「へんな……」

黒子のもとに駆け寄る。出血をして15分近く経っていた。佐天が傷口を圧迫し応急処置をしていたが、誰が見てもすごい出血量で美琴は背筋をぞくぞくさせ、がくがく震える。黒子の呼吸が今にも止まりそうだからだ。

「病院まで間に合わない…どうしたらしいの…。黒子をたすけ…るちか…らを…」

美琴の声に反応したのか、研究場の入り口から一人の男が入ってくる。

「常磐台のお嬢ちゃん! そんな能力が覚醒するなんて聞いてないにやー。」

金髪にサングラスの土御門元春だ。

「あんたは、あのバカの友達…? なんでここに? ? ?」

美琴は何度か街で見かけたことのある顔に驚いた。

「オレは裏社会の組織、グループに所属する土御門元春つづー者です。アクセラレーターが大変お世話になりました。お嬢さん…。」

「なつ…!」

美琴は殺氣を感じるも、黒子の側から離れられない。いや、離れたくなかった。美琴は土御門元春を睨み付け、絶望の中を葛藤した。——まさかコイツが…戦うしかないの…そんな時間なんて…黒子…

…くろこを助けたいのに…一瞬でコイツ殺してやろうか…

! ! !

## 十四 予言…全ての条件が揃つた時人は未知の世界へ。それがあなただつたな

「愛読ありがとうございます！無理矢理な設定ですみません（Ｔ－Ｔ）もう何でもアリだと…笑

ビリビリが夢の学園都市第一位に！笑

そんなことより黒子を助けられるのでしょうか…（Ｔ－Ｔ）

## 十誤 ウソつき…………ほんとは、私たちを……？（前書き）

あなたどんな時嘘をつきますか！？

自分を守りたい時に言つてしまつ弱い人間かも……（Ｔ・Ｔ）

だめだ！！笑

皆偉大なウソつこうな！！

十誤 ウソつき…………ほんとは、私たちを…………？

美琴は睨むのを止め、土御門元春に背を向けると黒子の元へもう1歩寄る。そして、今までにないくらい強く強く黒子を抱きしめた。

「黒子、大丈夫だよ…。わたしがあなたを助ける。絶対に助けるんだから…。」

そして隣で倒れている佐天さんの手を美琴は握った。佐天がうつすら目を開けると、まるで美琴が黒子と最後の時間を噛み締めているように思えてならなかつた。佐天の両方の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。止まらない……。

しらいひいぐうさんん。

卷之三

「ひいっくあれ。何か騒がし

「えーと……」

「涙を返せ!!」  
佐天は目の前の光景が信じられない。

——「いやなこじやないー思わずソシコんでしまったけど……」「……」「だが、魔の力……!?」

佐天は田をキラキラさせて語つ。

違ひわよ！バカ！」

美琴は顔を赤くし佐天さんを叩く。

痛いです！」

それを10m先で眺めていた土御門元春は、そろそろいいかと口を開く。

「ハーン…やつぱり今日は任務失敗つてことで、もう帰るにやー。

オレじゃ お嬢ちゃんには勝てそうにないし、また作戦練つたほうが良さそうだしな。じゃあねーお嬢ちゃん達。元気でにやー。」

そう言うと土御門元春はスキップしながら帰つていく。

「御坂さん… あの人何しに来たんですかね！？」御坂さん？？「佐天は視線を横に向けると、美琴は軽くお辞儀をしていた。顔をあげ、美琴は一息おく。

「私たちを助けてくれたのかな。あの人の能力肉体再生だったの。でもレベル低すぎて使いものにならない程度よ。だから佐天さんの頭脳を介して演算能力をあげてみたんだけど。だ…だからほんとにその気があったか分かんないけど… あの人助けられちゃつた。」美琴には、あの人戦う気もないのに現れたとしか思えなかつた。

「そーでしたのね。何はともあれお姉様、佐天さんー黒子は本当に感謝しておりますの。ありがとうございました。」

3人は笑いあつた。

「任務成功ね！帰りましょ。」

美琴は2人の肩に手を置きスキップした。

——レベル6んだとオ…。俺が守ろうとしたもんはなんだア！オレは…なあんで寝てんだア よオ…わかんねエ…なにもわかん…—— その時「オツ」と音がし地下9階は黒い殺気に包まれた。

（研究施設地上1階）

「いやあ今回の任務はやりにくかつたにやー。上に何で報告するよ？」

土御門元春は話す。

「僕なんて、御坂さんの前に出ることも無理でした…。でも久しづりに会えて良かつた！」

「海原！てめーはアホか！？まあ私も人のこと言えないんだけど…。」

「とグループの一員の結標も続く。」

「あのバカも力が戻れば自力で帰るだろーし、今日のところは解散するとしましょーかにゃー。」

皆それぞれ帰ろうとした時、地下から爆発音が聞こえ地面が揺れる。

「なんだあ…まさか！？」

土御門元春は嫌な予感がし、地下へと降りよつとした…がその時後ろから声がする。

「俺も一緒に行くぜ。」

土御門元春はその声がする方をみて笑う。

残りのグループの2人は気にせず闇の中へ消えてしまった。

十課 ウソつき…………ほんとは、私たちを……？（後書き）

「J愛読ありがとう」「やれこます！」

黒子が無事元気になりました！

最後何やら不穏な展開ですね。次回に続く！

## 十録 レロイアンのパンチを救え!!... みんなに腐ったヤローでもヒーローになれる

田の前に可愛い女の子が助けを求めていたら、是が非でもそのチャンスを逃すちやだめですーだつてヒーローになれるんだから(トト)

そうウイリアム・オルウェルだ!

美琴は慌てて後ろを向くと、黒い大きいものが見えた。

「羽…？」

その中心にいたのは…

「アクセラレータ…！」

美琴は思わず呼んでしまう。しかし、どこか様子がおかしい。

「Jの能力は何なの。え…演算出来ない！？？」

美琴には一方通行の能力が理解出来なかつたが、恐怖を覚えるほど不気味なものだと感じた。美琴は黒子と佐天さんを外へテレポートさせる。

一方通行はゆっくり手を動かした。それだけのことなのに、ゴオッと凄い衝撃が美琴を襲う。美琴はベクトル操作し衝撃を反射するも全てを演算出来ない…。美琴はその衝撃を全身に受け5m先の壁に背中からぶつかる。

「く…っ。」

美琴は地面に座り込むも、すぐに手を床につき起き上がり次の攻撃に備える。

——やばっ。衝撃を抑えきれない…——

一方通行はさらに手を動かす。美琴は磁力で床を持ち上げ周囲に盾を作り、ベクトル操作にて衝撃を和らげるも徐々に体が悲鳴をあげる。

「ぐつ…は…いた…た…」

美琴は膝と両手を床につけ、下を向いていた。

——はは…。レベル6とか言われても結局佐天さんがこの能力を演算出来ないと私は何も出来ない。私死んじゃうのかな…——

次の瞬間一方通行は両手を動かす。今までにない衝撃が美琴を襲う、

——襲わない？

美琴が顔を上げると、後ろ姿が見えた。黒いツンツン頭のその少年

は上條当麻である。

「大丈夫か？」

美琴は下を向き小さく頷くが、当麻のほうを見ようとしない。その眼からは大粒の涙が流れていった。美琴は助けにきてくれたことが嬉しかった。いや、上條当麻が来てくれたことが嬉しかったのか。

「上やん、ありや暴走だ。止める方法は今のところ一つしかねーんだけどなあ。」

——ラストオーダーがいないと話しになんねえんだよな——

土御門は頭をかく。

「どーにか出来ないのかよ！」「

当麻は衝撃を右手で消しながら言ひ。

「あの医者に言つてみつか。」

土御門はそう言つと電話をする。

当麻は美琴をチラッと見て心配そうな表情をする。美琴は涙を手で拭い立ち上がる。

「私にも何かできる？」

美琴の素直な態度に当麻はドキッとする。

「そんな良いムードなんていらないんだにやー。」

土御門が言うと2人は顔を赤くし、そっぽを向いてしまう。

「じゃあ作戦開始するんだにやー。」

そういうと、土御門は2人に作戦を告げる。

「かなり危険じゃねえか！俺…。」

当麻は作戦の内容に愕然と肩を落とす。

「私もかなり危険だつてば！」

美琴も不安な表情をする。

「大丈夫だにやー。3人力を合わせれば出来るつたあーいー。」

## 十錄 ルロイのパンチを救え!! ひんなに腐ったヤローでもヒーローになれる

「つむつむつむ！」轟ありがといりやれこめす！

当麻と土御門はヒーローですね（@\_@）

はあ…やつぱりアクセラレータ強いつす…第一位の座は簡単に変わんないですね…

## 十七 絶望の黒い闇が舞い散る中、あなたは何を思ひの……。

つてミサカは

時に人は些細なことで孤独を感じてしまうけど、そんな気持ちも案外たわいもない事で小さくなります（ - - - #）

自分は単純だから、普段あまり話さない人とちょっと話せただけで嬉しくなってしまう（ T - T ）笑

孤独な時もあるけど……そんな時は寂しいと誰かに言おう…言つ相手がない時は、隣家の犬を撫でよう…！…

犬好きなんで…

## 十七 絶望の黒い闇が舞い散る中、あなたは何を思つの……。

つてミサカは

3人は一方通行の前に並ぶ。

「よし！行くぞ。美琴こっちだ。」

当麻は美琴を引き連れ、一方通行へ真っ直ぐ突っ込む。何度も襲う衝撃を右手で消し去りながら前へ進む。2人は一方通行の目の前まで進む。その瞬間、後ろから土御門が一方通行に飛び付く。その手には携帯電話を持つて。美琴もそれに合わせて、前から一方通行の首めがけて突っ込んだ。

「アクセラレータアア！よく聞くんだ！」

その瞬間、土御門は衝撃で横に飛ばされる。

「ぐ…上やん…。」

とつさに携帯を当麻に投げ、土御門は10mは飛ばされた。

「いい加減にしやがれ！耳かつぼじつて待つてろ！－」

当麻は衝撃を右手で消し、右手で一方通行を掴み耳に携帯を近づける。

「アクセラレータ！大丈夫だよ、つてミサカはミサカ言つてみる。」一方通行の動きが止まる。その瞬間美琴は一方通行の首に付いてある装置に、電気を介した脳波リンクを作る。その結果、ラストオーダーの声は一方通行の脳に直接届くようになった。

「－あなたはわたしを守ってくれた強い人だつてミサカはミサカは言いたい。大丈夫だよ！あなたに何があるうと離れたりしないからつてミサカはミサカはあなたに気持ちを伝える－－

一方通行の動きが止まる。そして、ヒュツと黒い羽が消え一方通行は地面に倒れた。

「終わったのか！？」

当麻は少し疑問を抱きながら一方通行を手でつつぐ。

「じゃあコイツはオレが連れて帰るわ。じゃあほんとに解散だにや

ー。」

土御門はすぐに姿を消した。

「さてつと、俺たちも帰りますか。」

当麻は美琴に言つ。

「…がとつ。」

美琴は顔を赤く染めて咳く。

「んー何か言つたか！？」

「なんでもないわよ！ばか！」

美琴は笑つていた。2人はゆつくり歩いて階段を上り外に出ると、皆が待つていた。

「お姉様！」

「御坂さん！」

3人が美琴に詰め寄つた。

「黒子！佐天さん！初春さん！ただいま。」

4人は抱き合つた。皆一緒に帰つてこれた喜びを分かちあうように。それを、少し離れたところから見ていた上條当麻は微笑み、自分の住む学生寮に帰つていった。

「任務完了ご苦労様なりけるよ。さあわたしたちも家に帰りましょうよ。あの教会へ！」

ローラ・ステュアートがそう自然に言つたため皆理解するのに時間を要した。

「はーい！」

「えつ皆一緒に！？」

「教会つて…どーいうことですの！？」

「自分家に帰ります！わたし頭の花の変えがないと死んでしまいます…つてか困りますうきやつ白井さん！頭の花取らないでください！」

「えつローラさん冗談ですよね！？ちょつ初春つむせーい…白井さん御坂さん何とか言つてくださいー！」

そんなこんなで皆で教会へ行く。

「そこらのホテルよりベッドもシャワールームも凄いのよ…皆わく

わくしたれよ！！  
ローラが一番胸を踊らせていた。パジャマパーティーと勘違いしているようだ。

十七 絶望の黒い闇が舞い散る中、あなたは何を思ひの……。

つてミサカナ

「J愛読ありがとJやれこます！

人間とはもろいものです…。次回もお楽しみに

## 十八 未知なる敵を前につかの間の休息―束の間、ちょっとの間、数分、数時間

皆様もありますかね！？休みの日…起きたら夕方でした（Ｔ・Ｏ・Ｔ）  
がっかり感ときたら…「う（=ー=）

## 十八 未知なる敵を前につかの間の休息―束の間、ちょっとの間、数分、数時間

教会の地下には、ホテルのスイートルームのような部屋が三つあった。

「すう…シャンデリアー…」の部屋の畳くらいあるし…テレビもテカつ…！」

「お姉様お姉様！お風呂も2人で入っても悠々と足を伸ばせる大きさでしたわ～！わたくし絶対にお姉様とおつなじ部屋じゃないと嫌ですの～！おつなじ部屋～！おつなじ部屋～！」

「うつるさい！」

ビリッと火花が散る。

「ちょっと！電化製品壊したら即出でいくことになれよ…」

ローラは電化製品に思い入れがあるらしい。

「じゃあ初春。私たちはあっちの部屋だね。」

「はい！佐天さん！」

佐天と初春も2人同じ部屋が良かつたようだ。

そんなこんなで時刻は朝の7時を過ぎる。皆はローラが作った愛情たっぷりのご飯を食べ、

「まつず！」

「だいたいこのバーターテルトに天使の愛が育むときなんて名前つけること自体頭おかしいですよ。」

「いやあ空腹には刺激的すぎますよね。お腹空いてるのにそれを忘れさせちゃう凄さは天使っぽい…って初春！？」

「うつまーい！」

皆ローラを気遣う気持ちも忘れ、素直に批評する。初春だけが、甘いタルトでお腹を満たした。

「じゃあ今日はもう休みましょい。起きたらこれから話をしてや。」

ローラは入眠を促し皆を部屋まで誘導する。皆それには思つないと

もあるが、身体的疲労が限界の4人はベッドに入るとすぐに深い眠りについた。

そのまま日付が変わる。そして、暁になる。夕方近い！？

——お……お——

「いつまで寝たるか！」「オーラアア……！」

ローラは口を血走らせドアを蹴り破る。

「ひい……」

美琴と黒子は飛び起き、お互に身をよせ悲鳴をあげる。

「てめえらもう24時間以上寝てんだよクウラアア……」  
「……」  
「と放置かあい！ああ……！」

ローラは口を捲し立てる。後ろから騒ぎを聞きつけて佐天と初春がやつてくる。

「どうしたんだ……」

そんな初春の言葉は届かず……ローラは止まらない。

「こつちは朝からもう3食作って待ってんだよ！わしゃてめえらの妻じやねーんだよ！つてか初春！てめえなんかは戦つてもねーのにそんなに寝るとは……いい度胸じやねえかああああああ……」「ひいいい……やあああ……！」

ローラ・ステュアートに指揮官の威儀が初めて誕生した。  
皆は食堂に移動しミートのハーホイップ似を食べ……

「オエツ」

「ちょっと黒子だめよ……」

紅茶を飲み一息付く。

「ふー。じゃあ少しこれからのこと話したるか。」「

ローラが場をしきる。

「はいはい！じゃあ私がご飯作ります！

「賛成！佐天さん料理上手だもんね。じゃあ黒子は買い出しね！

「えー！お姉様も一緒に行きましょうよ。」

「じゃあ私は何しましょつかあー？うーん……」

初春は頭を悩ませる。

「じゃあ私は皆の帰りを家で待ってる女房役するーって違つー違つ！そんな小さな話じゃないたるよ…。」

皆がローラを寒い眼差しで見つめる。

「今日は皆無事逃げられたから良いたるも、これから先も佐天さんは狙われる立場にある。しかも、今日は美琴の能力覚醒まで演算したるし…より一層よね。だから、その根本である学園都市を潰してしまおうって話たるよ…。」

「えー！…」

ローラの言葉に皆驚いてしまった。

## 十八 未知なる敵を前につかの間の休息！束の間、ちょっとの間、数分、数時間

「愛読ありがとうございます！」

口一 ラ遂にやりました！威儀獲得です W(。o。) W怒つたら普通の日本語になりました！笑

19 陸、空、海、無限大.....。そして、ワンピース結成！（前書き）

なんか小組織つていいですよね！  
誰かとグループ組みたいっす（ - - - #）

# 19 陸、空、海、無限大…………。そして、ワンピース結成！

「学園都市を潰すの……？私たちの居場所……。」

美琴も驚きを隠せない。

「そのための組織なの！？ワンピースって！？」

美琴は熱くなり真剣な表情で言つ。

「えつワンピースって何なの！？」

何も知らない佐天は話が見えず初春に聞く。

「私たち佐天さんを助けに行くのにいろいろ助言もらって、その時にワンピースって小組織を結成したんです。ローラさんが指揮官で……。」

ローラも真剣な表情で美琴に言つ。

「そんなこと言いたるも、じゃあこれからどうしたるのか……？それ以外に道があるとでもお思いか！？」

美琴の顔が歪む。

——佐天さんが捕まればまたあのレベル<sup>6</sup>の実験も始まる……。敵は学園都市……か……。——

「能力開発だって非人道的で方法であるぞ！こんなこといつまで続けてよいと思うか！」

誰も言葉が出ない。ローラ・ステュアートだけが喋り続ける。

「終わらせなければならないのだ！多くの犠牲を出したあの戦争だつて学園都市がある限りまだまだ続くのだぞ。ローマが敗れ、イギリスや学園都市も壊滅寸前の今がチャンスなのよ！今しかなかろうよ！私たちで全て終わらせて新しい世界を……平和を掴みませんか！？」

美琴たちはただローラの気迫に押されていた。そんな大きなこととは思つていなかつたのだ。

「で……でも実際どーしますの！？勝算はあるんですの？」

黒子は信じられない様子で言つ。

「学園都市統括理事長アレイスター・クロウリーを倒せばよいのよ！場所も知ってる。きっと簡単なり。」

ローラは簡潔にわかりやすく言った。

「ほんとに簡単なの！？簡単なのかな…ねえ黒子！？」

美琴は黒子のほうを見る。

「お姉様！きっと簡単ではないですよ。あの人おかしいですしおンタに言われたくないたるよ！」

ローラは黒子の頭を叩いた。

「でも…。黒子！初春さん！そして佐天さん…やろうよ。出来るかわかんないけど、それしかないよ！私たちが力を合わせれば何でも出来る。学園都市が敵なら…それを倒すまでよ！佐天さんは絶対渡さない！！」

美琴は皆を見てにこっと笑う。黒子と初春、佐天もにこっと微笑み顔を見合せ頷く。

ローラ・ステュアートのもと、どこにも属さない小組織「ワンピース」結成の瞬間だった。そして、これから学園都市対彼女達の戦いが始まろうとしていた。

19 陸、空、海、無限大.....。そして、ワンピース結成！（後書き）

「J愛読ありがとう」「やれこますー。（^ーー）

第十 罰り飯を皿で食べなさい（前書き）

やめしむ願こそがやー。

## 武十 朝い飯は皆で食べましょ

とある日、アレイスター・クロウリーはローラ・ステュアートに連絡をとつていた。

「お前の口論みは分かつている。目的何だ？」

アレイスターは言つ。

「戦争でイギリス正教も学園都市も壊滅状態でしょ。良い機会たるよ。最大主教のわたしは魔術師達に組織の解散を命じたわ。」

ローラは髪をセットしながら話す。

「学園都市も終わりにしようぞ。」

ローラの言葉にアレイスターは笑う。

「組織を解散しようが何も変わらない。悪いヤツはいっぱいいるんだ。何も縛られない者たちが自由に暴れる世界になつてしまふだろう。」

しかしローラは真つ直ぐに言つ。

「でも、そこは個人の信念がある。そのように荒れ狂う者がもいるかもしたるが、何かを守るために立ち向かう者もいる。組織は時に人を間違つた方へ導く…まさしく今回の戦争たる。それなら組織などこりないのでよ。」

二人の間に沈黙が流れる。

アレイスターはゆっくり口を開く。

「やはり、君とは言葉で和解は無理そうだ…。」

「そうね。」

ローラもその言葉に納得する。

アレイスターは、では…と話を続けた。

「わたしは筒の中だ…。息をすることも地に立つことさえも放棄してしまった人間だ。わたしは戦つことが出来ない…。」

「ほーう。」

とローラは疑いの言葉をかける。

「とある場所に、能力開発施設がある。そこでは学生達の脳をいじるだけでなく、様々なデータや研究結果が納められており学園都市の核となる施設だ。もちろん虚数学区・五行機関によつて守られているがな。そこを潰し、わたしのところまで来れたら君たちの勝ちだ。」

だが

「ここまで来れるなんて思うなよ…。」

アレイスターはそう言つと通信が途絶えた。

「虚数学区・五行機関か…。」

ローラには解読できないが、未知の力を秘めていることに脅威を覚える。

——はあどうしたもんかね……

髪を整えローラはとりあえず食堂に行く。

「ちょっとーー。ローラ遅いつ。待ちくたびれちゃつたわよ。」

「パジャマ姿の美琴が目の前のご飯だけを見つめて言つ。」

「おはよづじやこります。とつぐにご飯できますよ。」

エプロン姿の佐天は味噌汁をお椀に注ぎながらいつ。

「佐天さんのご飯はすつじく美味しいんですよー！」

初春は自分のことであるかのように満足そうに言つ。

「全く…毎朝8時に食堂集合って決めたのローラさんですよ。皆

待つてますわ。」

黒子は呆れた様子で言った。

ローラは深刻な顔して入つてきたつもりだったが……

「なんか真剣に考えるのが巴からしくなるくらい……」

「あなた達朝からにぎやかなるのね。」

ローラは思わず笑つた。

——いや！ つてこの子達くつろぎすぎなのよ……食事当番もすっかり奪われたるし——  
心では泣いた……。

武十 麺飯は皿で食べましょ（後書き）

「J愛読あつがヒヒJやれこまか（<—>）

八十歳 戰士回憶 (前書き)

お願いします (トート)

## 武十壱 戦いに向けて！

朝ご飯を食べ一息つくと、ローラは皆を集めた。

「やることは決まった。でも敵は未知なる力を秘めたるわ。」

ローラにもわからない力。」

「そこで、今日から3日間はスキルアップしましょー！」

ローラは意気込んで皆に提案する。

「スキルアップ！！」

全員が驚いた。なぜならスキルアップは並々ならぬ努力が必要であり、短期間では不可能だからである。

「そんな簡単にスキルがあがるとは思えませんわ！」

黒子は半ば諦めモードだ。

「スキルアップにも色々あるわ。あなたはまず精神力を鍛えて動搖しないようにしたる。そして、もっと能力が応用できるはずよ！3日間よく考えたり。」

「応用ですの…。」

黒子は頭を抱えるも、何か考え出した様子でリビングを出て行つた。

「初春はまずこれを調べて欲しいのよ。終わつたら声かけたれよ。」

ローラは初春に資料を渡す。

「わ、わたしはスキルアップ無しですかー！？」

初春は自分だけ雑用を頼まれた気分になりショックを受けてている。

「終わつたら良いものあげたるからー！」

「うう…お駄賃に易々と乗ると思つたら大間違いなんですよー！」

初春は資料を持つと、走つて自分の部屋に戻つていった。

「さてと…」

ローラは佐天と美琴を見る。

「では佐天さん。美琴のレベル6進化のあなたの演算、全て聞かせて欲しいのよ。」

「あ…」

美琴も耳を傾ける。

佐天はゆっくり思い出しながら話しだす。

「えーと、多彩能力になれるのは学園都市の中でレベル5の第3位である電撃使いのみ。第3位より上位のレベル5のどちらかとの戦闘時に、あの時のよーにして…それで…」

佐天の言葉がつまる。

「で…続きは？」

美琴が意味深に聞く。

「能力が完全覚醒し暴走すると学園都市全域の能力者と磁力を介したネットワークを構築…第3位の電撃使いはAIM拡散力場の集合体に肉体をのまれ虚数学区となるつて…」

佐天は恐る恐る美琴を見る。

「…つ…」

「そ…そーいわれてもよくわからないわ。私自信がAIMバーストみたいになるつてことかしら…？」

美琴は首を傾げてローラを見る。

「ローラ…??」

ローラは真剣な顔をし考えことをしていた。

「虚数学区…」

——なんか…嫌な予感がしたるわ——  
ローラの表情から不安は消えない。

「美琴はスキルの制御に専念したれよ。その能力を自由自在にかつ  
コントロールできるように!」

決戦は4日後の午前0時。果たしてスキルアップは上手くいくのか  
…。

武士道 戦いと武士道（後書き）

あつがむいざやこもしたあ (@\_@)

## 武十式 スキルアップ発表会ー（前書き）

お願いします！

## 武十式 スキルアップ発表会！

「スキルの制御つったって…どーすればいいのよー…」

美琴は頭を悩ませていた。

「ですね！私にも何がなんやらサッパリなんですよー。」

佐天もお手上げ状態だ。

「でも、とりあえず佐天さんが半径50M以内にいれば脳波をリンク出来ることがわかつたわ。あと佐天さんがいなくとも半径50M以内にいる能力者とはリンク出来るみたいだわ。演算能力をあげることとは出来ないけど。」

美琴は自身の能力を分析する。

「大丈夫ですよ！私御坂さんから離れませんからーおりやーーー！」

佐天は美琴に抱きついた。

「ちょっと黒子みたいなこと止めなさいよーーー。」

美琴は変態が増えと呆れてしまった。

「はあー。」

美琴は行き詰まってしまった…

3日後…

初春はローラに渡された資料を完璧に調べてきた。

「どーですか！」

初春は得意気だ。ローラは資料に目を通す。

「何々…ほうほう。初春よくやつたりー皆これで次攻める建物の情報は完璧よーじゃあ初春にはこれを授けたるよ。」

ローラは箱をさしだす。

「手袋とボール…えーと、野球しろってことですか！？」

初春は全然望まない物を前にどーでもいい質問をする。

「その手袋は外の熱を中に通さないように出来てるのよ。薄い特殊な素材で出来てるから、初春の能力は手袋の中からでも使えるようになりますよ。」

「えっ！」

初春は驚く。

「そのボールは中に液体が入っていて外のスイッチで100からマイナス100まで設定できるようになつたるよ。軽くぶつけられ割れたるから好きに使うがいいわ。」

ローラは微笑んだ。

「ローラさん！私のことそんなにわかつてくれてたなんて…嬉しいです！これで私も戦えるんですね！わあ！」

初春は感動している。早くボールを試してみたくて待ちきれない様子だ。

「初春いいなー！」

佐天は羨望の眼差しを向ける。

「あなたにはこれを授けたるよ。」

佐天の気持ちを汲み取り、ローラはそつと差し出す。

「バット…。私はほんとに野球してろつてことですかー？」

「そうね！ヘルメットも授けるのよ！」

佐天はがっかりした。

「で、あなたはどつだつたの！？スキルアップしたるか？」

ローラがそう言つと、皆黒子に注目する。

「ふふふ。もちろんですわ！まずわたくしは滝修行をいたしましたの。精神的に強くなりましたわ。」

黒子は自信に満ち溢れた様子。

「ほんとかしら…。何かあの子ただ強気になつただけじゃない！？」

「お姉様！そんなことはなくてよ。ふふふ。そして、これが能力の

応用ですのー！」

シヨンシヨン！

「おおおー…って雰囲気で言つてみたけど何のことやらわからかねるが、何してたるの？」

ローラは首を傾げた。

「何もしてないじゃないのー！」

美琴も不満そうだ。

「いいえ！もう今テレポートしますのよ。」

ローラ達から10M後ろより聞こえる声に皆驚く。

「えつ…どうして…？」

「白井さんす」こです…！」

「わたくし考えました。テレポート寸前で中断してすぐにテレポートすると黒子の残存が現れます。名付けて一重の極みですわー！」

！

「あれ…何が聞いたことあるわね。黒子…あんた滝修行の時サボつて漫画読んでたわね！？」

「な…何言つてますのー…お姉様！」

「いやあ白井さんそーきましたか！」

「なな…何かありますー…佐天さんー…？」

「白井さんパクリですよね？」

「初春！失礼ですよー…」

「悪一文字の人に謝れよー…」

「外人のくせして日本漫画に詳しいじゃありませんのー…もつわたくし決めましたのでネーミングは変えませんのよー！」

決戦まであと6時間。作戦を練らなければ…

## 武十武 スキルアップ発表会ー（後書き）

読んでいただきありがとうございましたー。ありがとうございましたー。すみません

## 弐十參 決戦

決戦の日はきた。時刻は午前零時。5人はとある研究施設の前にいる。

「久しぶりに思いつきり力出せそつな氣がするわ！」

「私御坂さんから離れません！」

美琴は佐天を見てうなづく。

「佐天さんは命に変えても私が守るわー！」

「私たちもお姉様を援護しますわー！」

黒子と初春もうなづく。

「さあ行きたるぞー！今日は施設の完全撃破が目的たる。皆ひとつ端から壊すのよー！そして最上階12階の管理室のコンピューターを壊せー！」

「はいー！」

「そして、わかつたるわね…。」

「危ない時は逃げるですね。」

黒子の答えに皆頷く。

ローラは少し心配そうな表情で微笑み皆を見た。

「そうなるよ。4人無事で必ず帰つてくる」と。じゃあ皆の平和のために戦いたるよー！」

研究施設の入り口前で美琴は皆の一歩前に出る。

「皆離れてて。」

美琴を中心に太さ5M以上もの眩い光が天上に向かい登つていぐ。

「さあ行くわよ！」

美琴が両手を前に差し出すと、天高く登つていた電撃が音速を越える速さで放たれる。

「ゴオー！」

研究施設の入り口を粉々にした電撃は、ケーブルや電線に伝わり施設全体が停電するも、すぐに予備電力に切り替わり電気機器が復旧する。1階部分の壁は外まで貫通し、机・パソコンや警備口ボボまでも全て黒焦げとなり、プスプスと煙があがつていた。

「まだまだ力が有り余つてゐる。こんなんじゃ全然物足りない…この施設を潰すわよ！」

美琴は前に進む。

「すご…なんかさすが御坂さんですね。ちょっと道具もらつたからつて調子に乗つてる誰かとは大違いです！」

「佐天さん…ばかにしてますね！ふんつ。」

初春が横を向くと、何やら考えことをしている黒子に気付く。

「白井さん…？」

「…」

「…お姉様…何かやみくもに力を使つてらつしゃいません…？いやつ心配しすぎですわね。レベル6ですもの。力が有り余るのは当然のことですわ…よねーー

4人は2階へ進んだ。

### －研究施設8階－

金髪のロングヘアに大きな目をした高校生くらいの女の子ヒトミは異変に気付く。

「なんか停電したり騒がしいし。どしたんだろ。まさか！？」

「例のやつらが乗り込んで来たんじゃねーの？まあ1階から7階まで各階に警備ロボ50体とトラップ張り巡らしてるし、来れねーだろ。来たらボコボコにするまでよ！」

金髪にピンクのメッシュを入れたセミロングヘアで鋭い目をしたヤンキー風の女子マイは嬉しそうに言つた。

「戦い続けてボロボロになつたレベル5なんて相手になんないかもね！」

「あはは！」

### －研究施設2階－

「ゴオ！！

電磁波が飛び交つていた。

全長1Mちょっとの警備ロボの中には電気光線や小さな核弾頭や催眠ガスを放つものもいれば、両手足が生え人間のように武器を手にとり襲つてくるものもあり、ロボによつて機能は様々だ。

「ほんとどつかの都市の能力者みたいね！」  
と言しながら美琴は「ゴオツ」と超電磁砲を放つ。

美琴の周囲からは蒼白い光が放たれていた。

㊱十四 ハンクトロマイスター（漫畫也）

びつびり

## 二十四 ハレクトロマスター

黒子はその辺の瓦礫を使い攻撃し、初春はマイナス百度のボールをぶつけ凍つたところを佐天がバットで叩き壊していた。

「ふーつ。

「きやあつ」

佐天を後ろから押さえ馬乗りになる警備口ボ。目のような部分から催眠ガスを出す。後ろには手に拳銃を持つ警備口ボが今にも撃たんとしていた。

「……！」

佐天は恐怖で声も出ない。

——死ぬ——

パーン！

「……あれ。

銃声がなるも佐天は無傷であり眠たくもなかつた。

理由は最強の電撃使い。蒼白い光に包まれた彼女はこのフロア全体の出来事が把握できた。

佐天に降り注ぐ催眠ガスを音速以上の速さで放たれる電撃の衝撃波で撒き散らし、拳銃から弾が出た瞬間磁力で真横に飛ばし隣にいた警備口ボを破壊していた。

彼女はすでにこの場を支配していたのだ。

「皆そこを動かないで。」

美琴は佐天や初春・黒子を大量の鉄筋で覆うと、電撃をフロア全体へ放つ。

「ゴオオオーーー！」

と凄まじい音が響いた。

音が止まるのを確認した黒子は、初春・佐天とともに鉄筋のドームの中からテレポートする。

「お…お姉様。」

辺り一面真っ黒に焦げ付いた中、美琴だけが蒼白く光輝いている。

その圧倒的な力に黒子の背筋は凍る。黒子には無い力だ。

初春・佐天もその力に驚いているも、憧れのほうが強いようだ。

「すごーい！」

2人はテンション高く喜んでいる。

「よし！先へ進むわよ。」

「お姉様！大丈夫ですの！？力を使いすぎでは…」

「大丈夫よ！黒子。私本当に力がみなぎって溢れ出す感じがわかるの。これがレベル6の力なのかしら…。」

美琴は1フロアずつ、全てを焼き付くしていった。

そして8階へ。

「ここには警備口ボイないみたいね。」

美琴は辺りを見渡す。

その時、4人は急に身体が重たくなった。

「なつ……」

「な……何事ですか……？」急に身体が……

「ダメです……私立つてられないです。」

佐天と初春はその場にひざまづく。

「重力20倍なんだけど。どうかな！？」  
右手を4人に向けヒトミは言った。

「くつ……」

「ヒトミー・ホールガンはまだ動けるみたいだ。」

「うそー……じゃああなたは私の最大出力重力50倍おみまいするし

！」

「お……おもつ……」

美琴は思わず膝を床に付く。

「……黒子……動ける？」

「ゆつくつなら可能ですが……でも演算は少し難しそうですわ……。」

「なーにじゅべつひんだよー……」  
ヤンキー風な女の子マイが美琴の前に立つ。

「ねえ重たい？」

マイは美琴の顎に手をおき上に持ち上げる。

「助けて欲しかつたらそつ言つてみてよー！」

マイは美琴に顔を近づけ言つ。

「あんたは…ドSか！」

美琴がそう叫ぶと思わず頭から電撃が漏れる。それが直撃するもマイは微動だにしない。

「私もエレクトロマスターだ！んなもん効くか！」

マイは笑っていた。

二十四 ハレクトロマスター（後書き）

ありがとうございました

卅十五 ハレクタロマスターとハレクタロマスター（前書き）

お願いします！

## ㊷十五 HレクトロマスターとHレクトロマスター

「Hレクトロマスターって……」

美琴は驚く。

——なんかやりにくそうね——

「レベルは4だけど私はてめえに負けてるつもりはない！」

「私もいるしーどーするー？ 絶対絶命つてかんじ！ あははー…」

ヒトミも後から続く。

美琴はもう一度電撃を2人に向け放つも、マイがヒトミを抱え後ろによける。その一瞬重力から解放されるもすぐにまた身体が重くなつた。

「黒子… まずあの重力女を倒すわよ。」

「はい… でもどうやって！？」

「あの… 右手の前にいるものにしか重力は使えないわ。私が電撃であいつを攻撃するから一瞬でも重力がなくなつたらテレポートして…… 初春さん、佐天さんも出来る限り散らばつて欲しい。」

「…わかりました。」

「やつてみます。」

「じゃあ…」

美琴は全身に電撃を溜める。

「ちよつ… 何する気！？」

ヒトミは美琴の様子に焦つている。

——もう重力最大なんだけど……なんで力溜めれんの……？——

「ヒトミー・避けないとやべーよ……」

マイも電撃が効かないとはいえた警戒している様子。

「つー……行くわよ……」

美琴は右手をゆっくり前に出し、ヒトミーに向け電撃を放つ。ヒトミーは慌てて横に転がり回避する。

「こまよ……」

その瞬間重力から解放される。初春・佐天は左右に分かれ走り、黒子はヒトミーの背後にテレポートする。

少し遅れてヒトミーも背後に忍び寄る気配に気付いた。

「やばつー……」

「そんなことだらーと思つたよー……」

マイは作戦を読んでいたかのように黒子に攻撃をしかけようとしていた。

「……」

「なつ……身体が……」

マイは床に倒れこんだ。

「なんで……ヒトミーの能力が！？そーいえば……忘れてた……」

「そーいうことですわ！それではまずあなたかい。」

黒子はヒトミーの身体を空中へテレポートさせる。

「わわ……いたあ……」

ヒトミーは5Mくらい落下し地面に叩きつけられる。そこへすかさず

美琴が電撃を放ちヒートIIを直撃し、そのまま気絶してしまった。

「ぐう……！」なつたが……」

キイイイ———

「うう……これって……」

美琴は頭を押さえる。

「キャパシティダウン……ですのーー？」

「ふふ……私のポケットにはキャパシティダウン……のスイッチが入ってるんだよー！」

マイは頭を押さえながら言つた。

「そ……そんな」としても……あんただつて能力者じゃなーー！」

美琴は訳が分からぬ様子で言つた。

「確かに……私も能力を使えなくなるけど……でもてめえはレベル6……能力的に不利になつた時リセットするのに使えるんだよーー！」

「うう……」

——長期戦狙いなわけ———

ありがとうございました！

## 弐十六 最強のH�クトロマスター（前書き）

最強決定戦です…

## 弐十六 最強のHレクトロマスター

マイはキャパシティダウンのスイッチを切る。

「行くぞー！」

マイは全身に力を込め電撃を精一杯溜め、美琴に向けて一気に放つ。

「電撃攻撃とはい一度胸してるわね。」

美琴も力を込め、さらに大きな電撃を放つ。それはマイの放った電撃を飲み込み、そのまま直進していく。

「どのくらい高圧な電撃まで耐えられるのかしらね。」

美琴はマイに問いかける。

「ふふ…」

その電撃はマイに直撃せず、彼女の周囲を取り囲んだ。

「えつーー？」

「あなたは最強のHレクトロマスターだから知らなかつたかも知らねーけど、Hレクトロマスターは電撃を吸収して一時的に力をUPさせることができんだよー私はてめえを倒すために対エレクトロマスター戦を常に研究してきた…今こそ私が最強になる時だ！」

「そんなのアリー！」

美琴は驚く。

「でもね、今の全力でも何でもないわよ。」

美琴は平然と言つ。

「強がつてんじゃねーよ！」

マイは腹立ちを隠しきれず、全力で電撃を放つた。さつきとは比べ物にならない大きさだ。

「あんただけは電撃で倒したいわ。行くわよ！」

美琴は右手を前に出し、力を溜め電撃を放つ。2つの電撃がぶつかり直線を描くも、すぐに片方の電撃がもう一方の電撃をおしきり直進していく。

「くつ…」「…」

マイはその電撃をまたまた吸收する。  
「はあはあ…」

「力を吸収するのも体力いるのね。」

美琴は涼しい顔で話す。

「次は私も全力で行くわよ！」

「くつ…来てみろー！決着をつけてやるー！めえは私が倒してやるんだからなー！」

マイは目を血走らせ力を溜める。

「…私が最強だ…私が最強になるんだああ…」

美琴は全身から眩い蒼白い光を出す。眩しそぎて直視できないほどに。

そして、再び2つの電撃はぶつかりあつた。

辺り一面雷のような光に包まれるも、一つの光が直進しどゴオと壁を破壊する。

マイは電撃に押され身体が壁を直撃し、その場に倒れた。

「な……なんで電撃が効くんだ……！？」

マイは痛みをこらえながら不思議な表情をしている。

「そんなの簡単な話よ。私が最強のエレクトロマスターだからよー。なあんてね。」

「けつ。」

「でもあんたもなかなか凄かつたわ。勉強にもなったし。」

美琴は笑顔を向ける。

「次は絶対に倒すからなー！」

「はいはい。」

美琴は振り返り3人を見る。

「よし。じゃあ先に進みますかー！」

「おいつ

マイが起き上がるうとしながら話しかける。

「じつから先は…能力者はいない。レベル6のてめえはマネできるからな。私らでさえ行つたことねーし、何がいるかわかんない。き…気をつけるよ。」

「もううんー。その助言有り難く受け取らせてもらひつわ。」

美琴たち4人は9階へ進んで行った。

三十六 最強のハセクタロマスター（後書き）

ありがとうございました。

式十七 作りものの能力、..！？（前書き）

お願いします（^ーー）

## 武十七 作りものの能力、…！？

研究施設9階。

「こ」は学生の脳をいじつている場所のようだ。診察台と医療機器、パソコンが並んでいる。

「なんか静かで不気味ね。」

このフロアだけ病院のよつた、異様な雰囲気が流れる。警備ロボも能力者もいない。

美琴たちは奥へと進んで行つた。

とある部屋に白髪の70歳くらいの研究員と思われる白衣を着たおじいちゃんが机に向かっている。

「ぎやあーーー！」

美琴たち4人はお化けと間違え驚き悲鳴をあげる。

「おや…。」

「ひ…しゃべつた。」

4人はいまだに幽霊を見るような目で老人を見つめた。

「こんにちわ。君たちは能力者かのお？」

「は…はい。」

「おや…君はレベル5の…御坂くんじゃったかの。」

「あ…はい。私のこと」存知ですか？」

「もちろんじゅとも。君はここで能力開発されたのじゃから。」

「えつ…？」

「…そうだったつけ…？言われてみれば見覚えあるよつな…」

「君たちレベル5の能力開発は大変じゃつた…」

「えつ…」

「…どういうこと…私レベル1から努力でレベル5まであがつたのにこれじゃまるで…」

美琴に衝撃が走る。

「どういうことですの？能力開発の手助けはしても、その後の能力は個人のパーソナルリアリティーによるもの。レベルだつてそうですわよね！？あなたの言い方じやまるで能力開発のされ方で能力もレベルも決まるというように聞こえますわ！」

黒子は信じられない様子で言つ。

「その通りじやよ。能力開発は平等ではない。全て統括理事会の言うことに従い能力を振り分けてきたに過ぎないのじや…。」

「ウソ…そんなのウソよ…！私は自分で努力したんだから…絶対にそんなの信じない！」

美琴はわなわなと震えていた。今まで自分が築きあげてきたものが崩れそうになる。

「…誰かウソだと言つて…」

「ウソじゃないんじゃ。レベル5はわしらの開発の最高傑作じゃから。」

老人は続けた。

「能力開発はパーソナルリアリティーの獲得だと言つてているが實際は違うんじゃよ…。本当は死体から情報を採取してんじや。パイロキネシストの時は火炙りでじわじわ焼かれた人間の脳や細胞から情報をとつたのぉ…」

美琴は激しい寒氣に襲われる。

「君の能力は8歳くらいの女の子じゃったかな…。雷の電圧を徐々にあげて情報をとつたのぉ…あの子泣き叫んでおつたな。いやいや悪いことをしたが、全て君のためじゃ。」

その老人の言葉に美琴は床に座り込み、愕然とする。

——う…うそでしょ…——

「お姉様信じてはダメですのー」これは作り話ですよーお姉様!!!

黒子はしゃがみ込み美琴の両肩に手を置く。

「お姉様…」

「…。」

美琴は全く反応しなかった。

## 武十七 作りものの能力、…！？（後書き）

すみません… 完全なるフイクショソです（^ーーーーー）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5458m/>

---

夢のレベル6！？皆暴走しろー！！

2010年11月3日01時17分発行